

岩波文庫

32-004-8

杜 詩

第八冊

鈴木虎雄 訳注
黒川洋一

岩波書店

と し 杜 詩 第八冊 [全8冊]

1966年12月16日 第1刷発行
2005年2月22日 第9刷発行

訳注者 すずき とら お 鈴木虎雄 くろかわ よう いち 黒川洋一

発行者 山口昭男

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電 話 案内 03-5210-4000 販売部 03-5210-4111
文庫編集部 03-5210-4051
<http://www.iwanami.co.jp/>

印刷・精興社 製本・中永製本

ISBN 4-00-320048-9

Printed in Japan

岩 波 文 庫

32-004-8

杜

詩

第 八 冊

鈴木虎雄 訳注
黒川 洋 一

岩 波 書 店

目次

大曆三年春、白帝城より船を放ち瞿唐峽を出づ、久しく夔府に居り、 將に江陵に適かんとして漂泊、詩有り、凡そ四十韻……………	二
行くゆく古城店に次りて江に汎かぶ作、鄙拙を揆らず、 江陵の幕府諸公に呈し奉る……………	三
松滋の江亭に泊す……………	三
書堂飲既り、夜復た李尚書を邀えて、馬より下り月下に賦す絶句……………	四
帰雁……………	六
短歌行、王郎司直に贈る……………	七
憶昔行……………	三〇
舟月、馭に対し寺に近し……………	三四
暮 歸……………	三五
居を公安の山館に移す……………	三六
醉歌行、公安の顔十少府に贈る、顧八に請いて壁に題せしむ……………	三八
顧八分文学が洪・吉州に適くを送る……………	四〇
官亭夕坐、戯れに顔十少府に簡す……………	四七

公安にて韋二少府匡贊きやうさんを送る…………… 四

公安県の懷古…………… 五

王使君が宅に宴して題す二首(うち一首)…………… 五

公安にて李二十九弟晋肅ていしんしゆくしよくが蜀しよくに入るを送る、

余は沔鄂べんがくに下らんとす…………… 五

劉郎浦りゅうろうほを発す…………… 五

董邕とういに別る…………… 五

夜簫ひつりつ築を聞く…………… 六

歲晏行さいあんこう…………… 六

岳陽城下がくように泊す…………… 六

岳陽樓に登る…………… 六

裴使君はいしくんに陪して岳陽樓に登る…………… 六

歸夢…………… 六

青草湖せいそうこに宿す…………… 七

白沙はくさ駅えきに宿す…………… 七

湘夫人しょうふじんの祠…………… 七

祠南しなんの夕望…………… 七

遇に遣る…………… 七

憂いを解く	七五
鑿石浦に宿す	七七
津口に過ぎる	七九
空靈岸に次る	八〇
花石戍に宿す	八三
清明二首(うち一首)	八五
潭州を発す	八七
喬口に入る	八八
望岳	九〇
岳麓山・道林の二寺の行	九三
楼上	九六
遠遊	一〇〇
千秋節感有り二首	一〇二
蘇大侍御、江浦に訪う、八韻を賦して異を記す	一〇五
北風	一〇九
幽人	一一〇
江漢	一二三
地隅	一二四

舟中の夜雪に、盧十四侍御弟を懷うこと有り	二五
蚕穀行	二七
白覺行	二八
故の高蜀州が人日寄せられしに追酬す并びに序	二九
魏二十四司直が嶺南掌選崔郎中が判官に充てらるるを送り、 兼ねて韋韶州に寄す	二七
帰雁二首	二九
江南にて李龜年に逢う	三一
小寒食舟中の作	三三
燕子舟中に來たる作	三五
江閣雨に對し、行營の裴二端公を懷うことあり	三六
衡山県の文宣王廟の新學堂に題す、陸宰に呈す	三八
洞庭湖を過ぐ	四〇
舟に登りて將に漢陽に適かんとす	四四
杜甫の足跡	四六
杜甫年譜	四七
解説	五七

日本における杜詩	……………	(黒川洋一)	…二〇五
あとがき	……………	(小川環樹)	…三二

杜

詩

第八冊

大曆三年春白帝城放船出瞿唐峽久居夔府

將通江陵漂泊有詩凡四十韻

(大曆三年春、白帝城より船を放ち瞿唐峽を出づ、久しく夔府に居り、將に江陵に適かんとして漂泊、詩有り、凡そ四十韻)

大曆三年の春に、自分は白帝城から船を放って瞿唐峽を出た。ながらく夔州に居てこれから江陵へゆこうとするのであつて途中に漂泊しているあいだに四十韻の詩ができた。句解に弁じのべておいた如く本詩は松滋県附近にて作つたものである。

老向巴人裏 今辭楚塞隅
入舟翻不樂 解纜獨長吁
窄轉深啼狄 虛隨亂浴鳧
石苔淩几杖 空翠撲肌膚
疊壁排霜劍 奔泉濺水珠

老いて巴人の裏に向こう 今辞す楚塞の隅
舟に入りて翻つて樂しまず 纜を解きて独り長吁す
窄には転ず深啼の狄 虚しく随う乱浴の鳧
石苔几杖を淩ぐ 空翠肌膚を撲つ
疊壁霜劍を排す 奔泉水珠濺ぐ

杳冥藤上下 濃淡樹榮枯
 神女峰娟妙 昭君宅有無
 曲留明怨惜 夢盡失歡娛
 擺闔盤渦沸 敲斜激浪輪
 風雷纏地脈 冰雪曜天衢
 鹿角眞走險 狼頭如跋胡
 惡灘寧變色 高臥負微軀
 書史全傾撓 裝囊半壓濡
 生涯臨臬兀 死地脫斯須
 不有平川決 焉知衆壑趨
 乾坤霾漲海 雨露洗春蕪
 鷗鳥牽絲颺 驪龍濯錦紆
 落霞沈綠綺 殘月壞金樞
 泥筍苞初荻 沙茸出小蒲
 雁兒爭水馬 燕子逐橋烏
 絕島容煙霧 環洲納曉晡
 前聞辯陶牧 轉盼拂宜都

杳冥藤上下す 濃淡樹榮枯す
 神女峰娟妙なり 昭君宅有無
 曲留められて怨惜を明らかにす 夢尽きて歡娛を失す
 擺闔盤渦沸く 敲斜激浪輪さる
 風雷地脈を纏う 冰雪天衢に曜く
 鹿角眞に險に走る 狼頭胡を跋むが如し
 惡灘寧ぞ色を変ぜんや 高臥するは微軀に負く
 書史全く傾撓し 裝囊半ば圧濡せらる
 生涯臬兀たるに臨む 死地脱すること斯須なり
 平川の決する有らずんば 焉んぞ衆壑の趨するを知らん
 乾坤漲海に霾る 雨露春蕪を洗う
 鷗鳥牽糸颺る 驪龍濯錦紆ふ
 落霞綠綺沈む 殘月金樞壞る
 泥筍初荻に苞す 沙茸小蒲出づ
 雁兒水馬を争う 燕子橋烏を逐う
 絶島煙霧を容る 環洲曉晡を納る
 前聞陶牧を弁ぜん 轉盼宜都を払う

縣郭南畿好 津亭北望孤
 勞心依憩息 朗詠劃昭蘇
 意遣樂還笑 衰迷賢與愚
 飄蕭將素髮 汨沒聽洪鑪
 丘壑曾忘返 文章敢自誣
 此生遭聖代 誰分哭窮途
 臥疾淹爲客 蒙恩早廁儒
 廷爭酬造化 樸直乞江湖
 灩澦險相迫 滄浪深可逾
 浮名尋已已 嬾計卻區區
 喜近天皇寺 先披古畫圖
 應經帝子渚 同泣舜蒼梧
 朝士兼戎服 君王按湛盧
 旄頭初偃擾 鶉首麗泥塗
 甲卒身雖貴 書生道固殊
 出塵皆野鶴 歷塊匪轅駒
 伊呂終難降 韓彭不易呼

縣郭南畿好し 津亭北望孤なり
 勞心依りて憩息す 朗詠劃として昭蘇す
 意遣られて樂しみて還た笑う 衰えては迷う賢と愚と
 飄蕭素髮を將て 汨沒洪鑪に聴す
 丘壑曾て返るを忘れんや 文章敢て自ら誣いんや
 此の生聖代に遭う 誰か分とせん窮途に哭するを
 臥疾淹しく客と爲る 蒙恩早く儒に廁わる
 廷争造化に酬ゆ 樸直江湖を乞う
 灩澦險相迫る 滄浪深きも逾ゆ可し
 浮名尋かに已已 嬾計却つて区區たり
 近づくことを喜ぶ天皇寺 先ず披く古画図
 応に經るなるべし帝子の渚 同じく泣かん舜の蒼梧に
 朝士戎服を兼ね 君王湛盧を按ず
 旄頭初めて偃擾 鶉首泥塗に麗く
 甲卒身貴しと雖も 書生道固殊なり
 出塵皆野鶴 歷塊轅駒に匪ず
 伊呂終に降り難し 韓彭呼び易からず

五雲高太甲 六月曠搏扶

五雲太甲うんたいこうに高たかし 六月搏扶曠がったんぶし

迴首黎元病 爭權將帥誅

首こうべを廻めぐらせば黎元れいげん病やむ 權けんを争あらそいて將帥しょうすい誅ちゆうせらる

山林託疲茶 未必免崎嶇』

山林疲茶さんりんひてつを託たくす 未いまだ必かならずしも崎嶇きくを免まぬかれず』

○白帝城・瞿唐峽・夔府・江陵 皆すでに見える。○楚塞 夔州城の関塞。○窄輦 仇注にいう、峽窄せまく船転ず、と。窄は或は乍の訛か、乍はたちまちの意。○神女峰 すでにみえる、巫山県にある。○昭君宅 すでにみえる、歸州にある。○曲留 曲とは昭君の作った琵琶の曲、第六冊二〇五ページをみよ。○夢尽 宋玉の「神女ノ賦」の序に、玉が神女を夢みて覚めたことを記し、「寐いネテ之ヲ夢ミ、寤あメテ自ズカラ識ラズ、罔トシテ楽シマズ、悵爾トシテ志ヲ失ウ」といっている。○擺闔 捩闔に同じ、開合の意。○盤渦 うずまき。○欬斜 かたむく、ななめ。○輸 送る。○風雷 盤渦の音。○氷雪 激浪の色。○天衢 天上のみち。○鹿角・狼頭 灘の名、夷陵にある。○跋胡 「詩経」(狼跋)に、「狼其ノ胡ヲ跋ム」とあり、跋は躓ふむ、胡は領下の懸肉なりと注する。狼が進もうとして自ずから其の胡をふむとは進むことの難いことをいう。○寧変色 変色せぬことをいう。仇注に、「寧ゾ変色ヲ免レンヤ」というのは恐らくはよろしくない。○高臥負微軀 高臥するとは自己の本義に負おくことをいう。仇注に、「誠ニ恐ル猝ニ水患ニ罹リテ、此ノ残軀ニ負カンコトヲ」とあるが、恐らくはよろしくない。高臥はどうして水患にかかるという意を生じようか。○傾攬 かたむき、みだされる。○圧濡 おしつけられ、ぬらされる。○臬兀 鞬旒の省字、不安のさま。○斯須 須臾に同じ。○平川決 平らかに流れる川のきりひらかれてあること。○衆壑趨 多くの壑水の集まりそそぐことをいう。○乾坤 二字は副詞。○霾漲海 霾とは水気の土ふる如くであることをいうのであろう。漲海は水の満ちている江をいう。○春蕪 蕪は平野をいっている。○牽糸颺 鷗の飛びあがるときの白色の視覚における連続を牽糸にたとえて

いる。○驪竜 黒竜にして額下に千金の珠があるという。「莊子」(列禦寇)にみえる。○濯錦紆 竜・錦は水面に日光の長く碎けたことをたとえていう。○沈緑綺 緑綺は霞をたとえていう。○壞金枢 金枢は月をいう、木華の「海賦」にみえる。○泥筍苞初荻 泥筍は荻のわか芽をたとえていう。苞とは重なりあって芽ぐんでいることをいう。○沙茸出小蒲 沙茸とは沙辺にふさふさとしたもの、蒲の芽をたとえていう。小蒲はわかい「がま」草である。○水馬 蝦えびの細小なものの類かという。○檣鳥 候風かざみに用いる羽製の鳥、倪・五両などともいう。五両は鷄羽のめかたである。○絶島 はなれじま。○容煙霧 島内にいれる。○環洲 点点して環状をなす洲^す。○納曉晡 朝夕の光をいれる。○前聞弁陶牧 前聞は陶牧へかかる語。陶牧は陶郷の牧場、江陵県の西に陶朱公の塚があるという、その附近の原野をいう。陶牧の語は王粲の「登樓賦」にみえる。○転盼弘宜都 転盼はちょっとみかわす間をいう。宜都は荊州府宜都県治、「杜臆」にいう、宜都は夷陵州東九十里にあり、而して東のかた江陵までは尚お二百五十里あり、詩は宜都に到らんとする時に成れるなり、と。仇氏はさらに黄鶴注をも引いて本詩が宜都において作られたことをいっている。しかしながら案ずるに下句に直ちに「県郭南畿好シ」とあり、原注に「路ハ松滋県ニ入ル」とあるのからすれば宜都よりもさらに進んだことは明らかである。○県郭南畿好 県郭は松滋県のそとくるわをいう。南畿とは南方の畿、畿は王都の千里四方以内の境をいう。肅宗の時に江陵府を南都となしたのにより、荊州江陵府の属県である松滋は南畿の地である。○津亭北望孤 津亭は江津に臨む亭のことであろう。作者に前に「春夜峽州ノ津亭ニテ留マリ宴ス」詩(本書にはとらぬ)がある、朱注に本詩の津亭はその峽州の津亭をさすといっている、あるいはそうであろう。○劳心 旅づかれの心。○依憩息 松滋の県郭によってやすむことをいう。仇注にいう、舟、宜都に泊するをいう、と。浦注にいう、江陵に憩息するなり、と。今はともにとらぬ。○朗詠 詩をほがらかに吟ずる。○劃昭蘇 劃はくぎりをつけるさま、昭蘇は「樂記」にみえる、蟄虫が穴からでた時に夜が明けてあかるくなった如く、また仮